
そんな装備で大丈夫かww

ナインの弟子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そんな装備で大丈夫かWW

【Nコード】

N1348X

【作者名】

ナインの弟子

【あらすじ】

世界の半分、とってやろうじゃまいかWW。

色々とおかしい世界で頑張る勇者達と大魔王さんを描いた小説。

一番いいのを（ry）（前書き）

本作は筆者の妄想と徹夜明けの妙なテンション、筆者が面白いと思
った小説等のイメージ等より構成されており、大量の草と少量のネ
ットスラングを使用しております。

それでも良いと言う方はどうぞ。

あと、筆者は非常に打たれ弱いので辛口レビューはどうぞご容赦下
さい。

お気に召していただけなかった場合は迷わずブラウザバックをお願い
いたします。

一番いいのを)ry

はあ、今日も無事生きて帰れそうです。

W 黙ってるWW。

うるせーですね、この馬鹿。

何イ、馬鹿って言った方が馬鹿なんだよ。この偽ペイルウイングが！

てめえ今なんつった？

偽ペイルだよ。偽ペイルWW。

馬鹿は消毒だ！、くらえジエノサ〜イド！

あ、暴力はんたーい。

センサー、和泉くんがレディに暴力振るおつとってきます。

何がレディだWWW。

てめえなんてレディバで充分だWW。

いとワロスWWW

まWつWたWくWだWWW。

どうも、私はレンと申す紳士（ジェントルメン）です。

うそwwです。

淑女（レディ）です。

一応勇者をやってますww。

なぜ、勇者かと言うと、色々設定が楽だか、じゃなくて二ヶ月前に現れた大魔王ハタヤマが世界を滅ぼそうとしているからです。

なんでも、弱者は死すべし。がスローガンで「明日から本気出す」を連呼するという色んな意味で恐ろしい大魔王らしいです。

地球防衛軍の方々が何度か魔王城、いや大魔王城？（面倒くさいので魔王城とします。）に進行したのですが、恐ろしいまでの圧倒的火力で壊滅させられました。

最後の砦が簡単にやられんな。いとワロスww。

大魔王曰わく、大魔王を倒せるのは勇者しかおらんだろうww。

さあ、こいww。愚かな人間共よwww！

私は最上階で貴様等を待っているぞ。ネットゲ三昧でなあwww。

とのこと。

笑いすぎだろハタヤマww。

そこで、ふざけて近隣の民間人がRPG7を最上階に向けて発射したところ、「ちよ、空気読め」とか言いながらTシャツ姿のハタヤマが崩れゆく最上階から慌てて出てきたとか。

その映像を見た人達が意外と楽に倒せそうじゃね？

とかいう希望を抱いて大魔王に挑んだそうです。

みんな「あべしっ」「うわらばっ」

等とやられてしまったので、政府もほっとけなくなったのでしよう。

勇者募集wwのポスターを出したのです。

以下、その内容。

あなたも勇者になってみませんか？

生きがいを見つけない？

生きていたくない？

そんなあなたでも大丈夫。

勇者になれば職業が無職から勇者wになります。

二トの諸君、君が世界を救うのだwwwwww。

(面接あり)

今なら500人に1人、ショットガンプレゼント。

惜しくも抽選から漏れてしまった人にもダブルチャンス。

50人に1人、図書券500円分プレゼントww。

さあみんな奮ってご応募して下さいww。

…面白半分に応募するものではありませんね。

図書券が当たりました！と言われ、連れてこられたのは王様のマエジャワ氏の前。

働きマエジャワ乙ww。

そこで200Gと釘バットを渡され、良い笑顔で大魔王退治を依頼されました。

「依頼を受けてもらえれば図書券をプレゼントしよう。」

「嫌です。」

「そこをなんとかww。どうせ、やることも無いでしょ。」

「倒してくれたら世界の半分、くわれwてwやるw。」

「まwじwか。」

「今なら大魔王の住処もつけよう。財宝ザクザクだぜ。」

グッ！

「グッ！じゃねえよww。」

まあいいか。どうせ暇だし。

「よし、引wきw受wけwた。」

「まWかWせWたW。」

軽いやつだな。

「では頑張つてね。」

スタスタ

ガッ！

「スタスタじゃねえよ。この後どうすりゃいいんだよ。」

「ぐわあー！」

「と、とりあえずそこにいるマエジヤワにでも聞いてくれ。」

「りょうかいだW W。」

「なんだこいつは？、今までの死んだ魚のような目をしたニート共とはなにか違うものを感じる。」

「こいつになら。」

「任せたぞ…。」

マエジヤワによって案内されていく少女を見て、王はそう呟いた。

一番いいのを（ry）（後書き）

どうも、妙なテンションの筆者です。

こんな作品のために時間をとって下さった皆様には、心より感謝の言葉を贈らせていただきます。

どうもありがとうございます。

出来る限り早く更新出来るように頑張りますのでよろしく願います。

え、待ってない？

サーセン。

冒険のはじまり（前書き）

どうも、筆者です。

この回からいよいよ冒険が始まります。

ごめんなさい。うそです。

もう少し待って下さい。

この回では主人公の素敵ステータスが明らかにされます。

明かされていない部分はまた後ほど。

冒険のはじまり

「ねえ、マエジヤワ氏。これからどうすればいいの？」

「自分で考えろWWW。」

「…。」

「200Gだよ。」

「ああ？」

「私がもらったお金は。」

「同情するよWWW。」

同情するなら金よこせとマジで言いたくなりました。

ふざけんな、200Gなんて っちょを2つ買ったら終わりじゃねーか。

こんなん、大魔王を倒せるのか！

倒せねーだろ。ぶ ちょじゃ！

賄賂にもなりやしねえ。

王め、次に会ったら有り金ぜんぶ剥いでやる。

「ねー、マエジャワ氏いー。」

「しつこいな。そもそも俺はマエジャワじゃない。」

「へ？」

「俺の名はガリバーだ。」

「なるほど、それでそんなに背が高いんですねwww。解りますwww。」

「それで、次の行き先だが」

さっき教えないって自分で言ったくせにwww、まあいいや。

「どこなんですか？」

「いいだ。」

いつの間にか結構な距離を歩いていたようで、近くに見慣れない建物がありました。

「宿屋？」

「そうだ。わかりやすく言うと、イーダの宿屋みたいなものだ。」

「仲間を集めるんですねww。ww解ります。」

「いらっしやい。」

「邪魔する。」

「ひつれいしますww。」

「あら、また勇者見習いの人？、最近多いのよね。」

「じゃあ、この名簿にあなたのステータスと求める仲間の特徴を書

いて。」

「だが、断るw!」

「てめえ、切るぞ?」

「すみませんした。」

冗談ですから腰の刀に手を掛けながら言わないで下さい。怖いです。

「じゃ、書いて。」

「だが、」

ジャキン

ビクッ!

「こ、これに書けば良いんですよね?」

「ええ。」

半分抜刀してる。怖〜。

まあいいや

素敵ステータス

レベル1

名前 レン

性別 女

体重 ? kg

3サイズ ? ? ?

ちから 6

まもり 7

まほう 0

物理攻撃力 18

物理防御力 1 1

魔法攻撃力 0

魔法防御力 1 5 6

スキル カウンター（小）

素早さ 7

体力 2 4

装備1 釘バット

装備2 私服

へー、私のステータスってこんな風だったんだ。

魔法防御ww。

まあいいか。

「出来ました。」

「これで良いですかww?」

「はい、大丈夫よ。」

「じゃあ、ここに募集する仲間の特徴を書いて。」

「わかりました。」

えと、どうしようかな。

特徴、魔王

特技 魔王

性別 魔王

と。

「はいww。」

「残念だけど全く同じ事を書いた人が5人いるわ。」

「最初の1人は魔王を手にして出て行ったけど、あとの4人は既に屍よ。」

「ちよ、魔王に頼るなWWW。」
仕方ない。

特徴 飛行能力

性別 女

一言 ペイルウイング

と、これでよし。

こんな人居ますかWWW?

「もちろんさ。」

「教祖様 ZWWW。」

にしても、地球防衛軍みたいな人は意外といるんだな。

「何人くらい居るんですか?」

「50人。(ボソツ)」

「は？」

「50人程居ますよww。」

「多過ぎだろwwww。」

「ええ、それが何かww？」

「開き直らないで下さい。」

「じゃあ、適当に1人呼ぶよ。ちよつと待っててね。」

「ちよ、私の意見は完全無視ですかww。」

「冗談よ。この中から選んで。」

そう言って渡されたのは、先ほど書かされたのと同じような書類だった。

ちよ、個人情報ただ漏れww。

冒険のはじまり（後書き）

こんな作品の第2話を読んでいただいております。

1話のあとがきに入れ忘れたのでここにて、

むしゃくしゃしてやった反省はしているが後悔はしていない。

出来る限り早く更新しますのでよろしくお願いします。

相性32%くらいが丁度いい(前書き)

どうも、筆者です。

相変わらずの妙なテンションで書いてます。

今回はやっと仲間キャラ(仮)が登場しました。

1話にも出てたやん。

すいません。

相性32%くらいが丁度いい

「本社は個人情報保護のために第三者に個人情報を公開する場合には必ず事前に本人の許可をとりますww。」

「うそつけww。」

カウンターの横に無造作に積み上げてある書類をみたら、誰にでもわかるわ。

「ばれちゃいました?てへっ。」

「てへっ。じゃねーよ。」

まあいいか。

渡された三枚の書類に目を通す。

なにになに?

「草タイプ、炎タイプ、水タイプ?」

「ライバルさんもお待ちかねよ。」

ケモンかwww。

「バケモン？」

「ポケモンだ！」

「がずれてるわよw。」

「あ、本当だwww。」

「そのタイプは魔法のタイプの事よ。」

「草タイプwww。」

それなんていじめwww。

「リーオンで桔梗って奴がいたでしょ。それみたいなものよ。」

「マジか！草タイプ、侮れねえwww。」

「この三人を選んだ理由は、あなたに近いステータスだからよ。」

「パーティーのお荷物になりたくないでしょ。」

確かに、大魔王を倒した時に棺桶の中とか勘弁www。

「よし、名前で決めよう。」

1人目、視仁摩 栗さん。

「死にまくりじゃねえかwww。」

「彼女なら、そこにいるわよ。」

「え？、あれって棺桶www。」

「棺桶の中よ。」

「やっぱりかwwwwww。」

既に屍でしたwww。

「彼女と旅をすれば自動で力が上がっていくわよ?」

「引きずってる、それ棺桶引きずって歩いてるだけだからWWW。」

「駄目だ。駄目。」

「2人目は、っと」

∴。 ハネス・フォン・ツクザール

「極東支部長じゃねーかWWW。」

あの人を連れて行くわけにはいくまい。

イジス計画も控えている事だしなWWW。

「じゃあ、残った人で良いです。」

「じゃあ、これに判子を。」

「はい。」

「ん？、ピタッ。」

「どうしたの？早くして。」

「早くして。じゃない！」

危うく、保証人にされるとこだったわ！」

「チッ！」

「今、舌打ちしたよこの人www。」

「お金、なんですぐ無くなってしまっくんwww？」

「wwwつかうからじゃまいかwww。」

「wなんて、こったいww。」

「とまあ、冗談は顔だけにして。」

「冗談はここまでにしてだろww。」

「3人目の和泉さんwwでいいのね？」

はい

いいえ

選択肢だ、と。

ここは、はいだらー。

「和泉さん、ボスがお呼びよー。」

誰がボスだ！

スネーク でいい。

また、 がずれたよ。ワロスww。

どうも、キャンベルです。

うwそwつwけw。

「今すぐ、人生のスイッチを切れ！」

「だWまWれW W。」

「仲が良さそうね。じゃあ、紹介料として1000Gいただきます。」

200Gしか渡されてませんが何か？

「負ける」

「いやよ。」

「そこをなんとか。」

「こちらら、200Gしか渡されなかつたんだよW W。」

「それは、悲惨ね。」

「じゃあ、仕方ないわ。」

「W400Gで手を打とうW W。」

「粉バナナア！」

「2人分のGを合わせれば足りるでしょ。」

ニコッ。

うわっ、俺達から金を搾り取れるだけ搾り取るつもりだよこの女。

「どうする？大佐。」

「やらないか。」

「W黙WつWてWろWW。」

仕方ない払うか。

400Gを

払う

払わない

まWたW、選択肢かWW。

相性32%くらいが丁度いい(後書き)

この作品を見てくれた皆さんに感謝の言葉を贈ります。

どうもありがとうございました。

またのお越しを心よりお待ちしております。

人生はタフなやつが勝つ（前書き）

どうも、筆者です。

この回でようやくパーティーメンバーが1人できました。

ちなみに、2人ともキラに名前を書かれても死にません。

まさか、偽名！？

人生はタフなやつが勝つ

ここは、はい と素直に頷くべきですね。

「だが、断る！」

「半額にしろww。」

「嫌です。」

「じゃあ、わかった。半額以下にしろww。」

「もっと嫌です。」

「おちよくつとるのかww？」

「そうですねww。」

「あ、冗談です。謝りますから刀をおろして下さい。いや、振り下ろすんじゃないですねww。」

ズババッ！

「うわらばっ！」

とっさに近くにあった物（和泉）を盾にしてみたww。

「和泉い〜！」

「いや、平気ですけどねww。」

うぎっ、なんでしょうがこのタフさは。

「『ぶっ、ぶっ！』」

いや、スネークが撃たれた時みたいな声出されても。

この、メタギフリークがww。

「で、払うのか払わないのか？」

「払います。払います。」

「ほら和泉、金出せ、金。」

「ソロモンよ私は帰ってきたあ！」

確かに間違っではないですねww。

結局、和泉が意外と金を持っていることが判明し、無事に修羅場を切り抜けることができました。

初めから出せやwww。

私達が宿屋から出ると、マエジャワことガリバーさんが近寄って来ました。

「無事にパーティーメンバーを見つけることが出来たようだな。」

「これは、王からの選別だ。受け取ってくれ。」

ここでもさかのショットガンを取り出してきました。

ラッキー、500人に1人しか当たらないショットガンだぜ。
と素直に喜んでいたら、

「あ、間違えた。こっちのポケットだったWWW。」

図書券だ、と？

「残念だがそういうことになるなWWW。」

人の心を読まないで欲しいものです。

「それじゃ、俺は帰るよ。とりあえず最初はネズミーランドにでも
行って親睦を深めることだな。」

「あ、色々ありがとうございます。金寄せWWW。」

「金はやらん、じゃあな。」

ガリバーさんも去った事だし、見せてもらおうか、ネズミーランド
の性能とやらを。

「さあ、和泉さんとりあえず行きましようか。」

「ええ、これからよろしくね。レンさん。」

ニコッ。

なんでしょうか、これは。
さっきと全然イメージちやうやんけ！

「イメチェンしてみたの。どうかしらレンさん。」

「そっちのほうかはるかにマシです。」

「ずっとそのままできて下さいww。」

「だが、断る！」

「コイツ。」

まあいいか。

「とりあえず町の外に出ますからね。」

「うー。」

私達は並んで歩き出した訳なんですが、ここで一つ思い出した事がありました。

俺達が、ガダムだww!

じゃなくて、

何で、

な、何で歩いてるの？

ペイルウイングだろ、

とwwwwやwwww!

「緊急チャージww。」

スライムが現れた。

「丁度良い。イライラしてたんだ。」

スーパールボッコタイム始まるよ〜！

と思っていた時期が私にもありました。

人生はタフなやつが勝つ（後書き）

こんな作品を見ていただき、誠にありがとうございます。

できるだけ早めの更新を心掛けるので、どうぞよろしくお願いします。

大魔王の楽しい人事異動（前書き）

どうも、筆者です。

今回はあれです。

スライムさんが出て来ます。

皆さんもスライム系を狩るときは気をつけましょう。

大魔王の楽しい人事異動

状況説明

可愛らしいスライムさんが襲ってきました。

「なんだ、このスライムは？」

「敢えて言おう、強過ぎます、と。」

テラ、ツヨスｗｗｗｗ。

勝てねえｗｗ。

体当たり一撃で木が2、3本折れるとか、ありえん。

和泉はタフだから、まだ良いとしても、私に当たったら確実に骨何本か持っていかれちゃいますよ。

もちろん、こちらも様々な攻撃を仕掛けるわけですよ。

釘バットとか釘バットとか釘バットとか、ちなみに和泉の武器はハンドガンです。

でも、まるで効かない。

ドラクエでいうと、メタルキングにせっかく雷光一閃突きを繰り返したのに、あの気の抜けたような効果音が鳴り響いて、

ミス、ダメージを受けない。と表示された時のような絶望感です。

このままではいずれ全滅ですね。はい。

「和泉、逃げるぞ。これは死ぬ。」

「合図をしたら左右に散開、町まで戻る。」

「了解。」

和泉がスライムの攻撃を避けながら短く返事した。

「当たって!」

私が投げた聖水（和泉が持ってたやつ）が当たると、水が蒸発する
ような音がして、スライムの動きが一瞬止まった。

「今だ！」

和泉は右へ私は左へ駆け出した。

後ろからどンドン音が迫ってくる。

追い付かれたら、まずいということはある。

和泉の武器はハンドガンだから援護を頼もう。

「ちょっと今ピンチだから助けて和泉い。」

「返事は無い。」

まさか、別のモンスターに？

いや、あいつに限ってそんな。

和泉の走っていった方には、フライングヒューマノイドしかいな

った。

…。

「…あいつ、飛べたんだww。」

かくして、無情にも1人になった私。

ちくしょう。

スライムがもう、すぐ後ろまで迫っている。

どうやらここまでのようですwwww。

サーセンwwww。

「諦めるのは、まだ早いぜ。」

人の心を読むのは止めてもらえませんかね。

「ガリバーさん？」

「もちろんさ。」

教祖様 乙 W W W。

ズバツ！

突如現れたガリバーさんが、スライムさんを一撃で葬り去ったようです。

「怪我は内科医？」

「黙ってる W W。」

ガリバーさんにそのまま町まで送ってもらうことにして、歩きながらあのスライムさんがなぜあんなにも強かったのか教えてもらいました。

「ええ？、大魔王がですか？」

「そつだ。」

聞くところによると大魔王が珍しく動きを見せたそうぞ、

「大魔王の楽しい木造建築？」

「違う、大魔王の楽しい人事異動だ。」

その内容は、モンスターを全員レベル60以上にする。

レベル60以下のモンスターは死wぬwがwよい。

とのこと。

「酷いですね。」

「その点は大丈夫だ、レベル60以下のモンスター達は大魔王の訓練所に送られ、強くなって帰ってくるらしい。」

「そつちじゃねえよwww。」

「低レベルのモンスターはレベルアップ出来ても、低レベルの勇者はレベルアップ出来ねえじゃねーか！」

「一言、文句言ってやる。」

「大魔王にか？」

「どっちやってっ？」

「いじするんですよ。」

「それは、ごく普通の携帯電話？」

「ええ。」

ピッ、ピッ！

トゥルルルル、トゥルルルル！

「メタギ？」

ガチャ！

「ああ、もすもす私、私、私だけどね。」

「大魔王いる？」

「うん、そうそう。」

「いや、ちょっと言いたい事があったね。」

「うん、頼むよ。」

「…。」

「…。」

「…。」

「やっと出たか、この人でなし。」

「お前が余計な事するせいでレベル上げが出来んじゃないか。」

「とつとと元に戻してよ。」

「…。」

「まあ、それはわかるけど、君の言っていることもわかるけど。」

「とにかく」

「あ、ちょっと待て、切るな。おい。」

ツーツーツー

「切られたか。」

「大魔王は何だった?」

「レベル上げが出来ないって抗議したら何て言ったと思います?」

「さあ?」

「『ハイハイ、ワロスワロス』ですよ。」

大魔王、許すまじ。

やつ名義でピザ頼んでやるわwww。

「ガリバーさんも食べます?」

「あ、ああ。」

なんだコイツ?

始末した方がいいのか?

いや待て、もう少し様子を見るべきか。

「うーん。」

ガリバーさんが何やら唸ってますが、どうにか町に到着することが出来ました。

良かった。
良かった。

大魔王の楽しい人事異動（後書き）

相変わらずの妙なテンション。

筆者です。

皆様にいつも通り御礼を。

この作品を読んで下さってありがとうございます。

これからも更新頑張ります。

ここで言い訳を一つ。

別に普通の小説が書けないわけじゃない、あの小説が面白すぎたのがいけないんだ。

あの作者は凄かった。

その小説が面白すぎて自分でも、こんなのを書いてみたいと思ってしまうたわけです。

言い訳してスマン

名前なんて記号です。偉い人にはそれが（ry）（前書き）

どうも、筆者です。

この回は登場人物紹介です。

なので短いですが、もう少ししたら次話を投稿するので許して下さい。

名前なんて記号です。偉い人にはそれが (ry

天戸屋 レン

本作の主人公。

顔立ち ベリーナイス

性格 クール

年齢 不明

特徴

魔法防御がなぜか

物凄く高い。

それなのに魔法

攻撃は0。

謎の多い人物。

影宮 和泉

主人公のパーティーメンバー。

顔立ち 普通？の少女。

性格 天然

年齢 不明

特徴 かなりのメタギフリーク。

無限バンダナを入手するために大魔王を倒す冒険に出た。

頼れる仲間だが、コートの中では目が死んでいる。

我川 庸七

顔立ち イケメソ？

性格 おだやか

年齢 非公開

特徴 基本的に面倒事が嫌い。昔は目が死んでいた。

大魔王ハタヤマ

顔立ち 普通

性格 不明

年齢 不明

特徴 普段は死んだ魚のような目をしているが、ゲームの発売日には目を輝かせる。

名前なんて記号です。偉い人にはそれが（ry）後書き（

タイトルの通りです。

読んでいただき、ありがとうございました。

お昼ご飯ですよー。(前書き)

遅くなり、申し訳ありません。

昨日のうちに投稿するはずだったのですが、急な用事のため今日になってしまいました。

では、ごんげ。

お昼ご飯ですよー。

「今、なんて？」

和泉にそう聞き返される。

「だわからわ、人を襲いますwwwwww。」

和泉が呆けた表情でこちらを見ている。

ちよww、殴りたいwww。

ハタヤマが出した命令である大魔王の楽しい人事異動こと、勇者撲滅大作戦その1、『雑魚は消毒だ、序盤に高レベルとご挨拶ポポポインwwww』によって私達低レベルの勇者には非常に暮らしにくい世界になってしまいました。

そこで私が考えた結果が先程の「」の中身です。

「私達と同じくらいのレベルの勇者を倒して経験値をもらっちゃい
ましようwwww。」

「なるほど、経験値がもらえてお金、アイテムも手に入るとい
う石二鳥な計画なわけだね。」

「ちょwwww。」

鬼畜すぎww。この人は鬼だwwww。

経験値だけじゃなく、お金とアイテム袋も剥ぎ取ろうとしてるう
うwwww。

相手にしてみれば、まさにいい迷惑、歩く災害wwww。

誰がこんな酷い計画を…。

どうみても私です。本当にありがとうございましたwww。

「話も決まった事ですし、何か食べに行きませんか？」

「お米食べる。」

「黙ってるwww。」

「ファーストフードで良いですか？」

「もちろんじゃー」

「マクドナルドにしましょうか。」

金なら10枚

銀なら200枚

銅なら10000枚。

店内には、どこかで聞いたことのあるようなキャッチコピーがエンドレスリピートされていました。

近頃、巷で噂の教祖様のいかがわしい缶詰めを買いという意味らしいです。

「スペシャルバーガー、おいしかったですね。」

「ですねー。」

珍しく、普通に和泉さんと話せてますww。

「和泉さんは、旅に出る前は何を？」

「しがない女子高生をやってた時代もありましたなあ。」

「ちょww、女子高生でww、見た目は小学生から中学生の間くらいなんですけどww。」

これが俗に言うロリってやつですねww。わかります。

「中学生だと思ってました。」

（小学生だと思ってたのは内緒。）

「何度補導されかけたことか。」

「でしようねww。」

それが今では、しがないペイルウイングですからね。

しかも、ピンチの時しか飛ばない。

ピンチにドライブならぬ、ピンチにウイングってやつですか。

…人生ってわからないものなんだなあ。

マクドナルドから出た私達はまた町外れに向かって歩き出した。

「とっちらで、どっで襲った？」

と和泉が聞いてきます。

「お前は襲つより襲われる側だ！」

とツツコミを入れそうになったのは内緒だ。

「町外れの樹海とかでOK？」

「うは、把握w。」「

和泉がそのセリフを吐くと、なんか微妙。

「でも何人も襲ったらHQ（勇者連盟の意）に連絡されるんじゃない？」

このメタギフリークめww。

「そのために、ある作戦を施します。」

「その作戦とは、名付けて『夢いっぱい魔物いっぱい、夢破れて故郷に帰るがよい』です。」

「！」

ネーミングセンスないな私。

次回に続く

おまけ

「あの2人遅いな。」

「ちわー、ピザロケットですー!ピザお届けに参りました。」

本当に来た だと。

「あ、私です。」

「請求は魔王城をお願いします。」

「でしたら、ここにサインと請求先の電話番号お願いします。」

電話番号しらねえ。

「…やっぱり払います。」

「あーしたー！、またお願いしやーす！」

「ああ、金が…。」

「奴ら、25枚も頼みやがって。」

いつの間にか忘れ去られていた男がボソッとそう呟いた。

お昼ご飯ですよー。(後書き)

やっちゃまった。

えと、ごめんなさい。

本作をこれからもよろしく願います。

いよいよ作戦決行ですねww。わかりますww。 (前書き)

遅くなつてすいません。

相変わらずの妙なテンション、筆者です。

最近、前書き書いてる時に、俺って筆者？、携帯で文字打ってるんだから打者？
いや、それは野球か。

とか考えてます。

まあ、筆者でいいですよね。

では、どうぞ

いよいよ作戦決行ですねw。わかりますww。

「その作戦とは、人間やwめwなwいwか？大作戦です。」

「うほっ、いい作戦！」

「つまり」

「つまり、モンスターに化けて勇者を襲撃するという事か。」

さすが和泉。理解が早い。

「その通り。勇者を襲うときには、適当に変装しますww。」

「スークと タコンなんてどっぴでじゅっ。」

「却下ですww。」

「でじゅっねww。」

「私は、この被り物をして敵の目を欺きます。」

「奇遇だな。私も被り物だ。」

「ちょww、ダンボールでww、どんだけメタギファンなんですか
wwwwww?」

そんなんじゃ勇者を和ませるだけですよ。

「…今のレンには言われたくないな。」

「なっ！」

「失礼な。人を驚かす時はカボチャの被り物って相場は決まってるんですよ？」

「それ、なんてハロウィンwwwwww。」

「それに、このカボチャは、幻の超力^{スーパ}カボチャ、ランクで言うと超ヤサイです。これを被ればまさに超サヤ人という激レアな物なんですよ。」

「それを言うなら私のだって！、ダンボールを超えたダンボールを

超えたダンボールなんだよ。つまり、超ダンボール2（ツー）」

「わかったかね。ただの超 イヤ人なんかじゃ、お話にもならないよ。」

なにこの子、可愛い。

「わかりました。では私はカボチャ、和泉はダンボールで行きましよう。」

「わかればよろしい。」（無い胸を精一杯張る）

不覚にも和泉に萌えてしまったWWW。

鬱だ。死のう…。

まあ、死にませんがねwww。

なんて事を考えてる間に町外れに着きました。

「さて、ここらに隠れますかwww。」

「ねえ、和泉さん？」

「あ、れ？」

さっきまで一緒だったはずの和泉が居なくなってる。

近くにあるのは、ただのダンボールだけ。

「和泉さん、和泉いー。」

返事はない。

ぐすっ。

「て、ダンボールがありましたねwww。忘れてましたwww。」

「馬鹿な、ダンボールと一体になった私を見つけ出しただと。」

「親父にも見つかったこと無かったのにいwww。」

「しー、人が来たみたいですよ。」

「では、打ち合わせ通りに。」

「ああ。」

ガサガサッ

…。打ち合わせしてない。

町の中心部方向から、町外れに向かって2人の男が歩いてきた。

先手必勝！

いきなり躍り出て、敵の度肝を抜いてやんよwww。

そんな事考えてたら、パシユツ、パシユツ！と短い音が2回して、男たちは動かなくなりまたwww。

「…。ヘッドショット命中。推定ダメージ7200、経験値300
入手。」

「ちょww、和泉強すぎワロタwwwwww。」

和泉、怖ろしい子ww。

「おーい、どうしたー?」

どつちから仲間がいたようですねwww。

おそらく1人だと思います、が近付いてくるような足音がする。

「どうします、和泉？」

しかし、振り返った先に既にダンボールの姿は無い。

どこに行ったんですかね？

「うん、何だこのダンボールは？」

いつの間にか、敵（一応勇者なんですけどね）の目の前に1つのダンボールが置いてある。

さすが茶色の彗星WW。

その速さは通常のダンボールの3倍だwww。

まあ、通常のダンボールの速さなんて知りませんがねwww。

「ふふ、残念だが俺の目を誤魔化す事は出来ないぜ。」

「ダンボールと言えば中に誰か居ると考えるのがもはや基本。」

いや、基本じゃないですからねwww。

そう言っつて男はショットガンを構えた。

「ならばアクションを起こす前に潰すのみだ！」

ちよwww、ダンボールに向かってショットガン発砲とかwww。

オーバーキルにも程があるwww。

ダン！ダン！

本当に撃つたよこの人www。

ダンボールはおそらく粉みじんでしょうねwww。

和泉さまあwww。

まあ、ショットガンくらいでやられる和泉ではありませんがね（キリッ）。

なんという厨二設定www。

「なっ、壊れない？」

「フリーズ。」

驚いている敵を和泉がホールドアップしたようですwww。

戦闘中の和泉って超クールww。やべ、惚れるww。

と、そろそろ私も出て行きますか。

経験値の定義付けは意外と適当なので、今出て行けば何もしてないのに経験値がもらえるでしょう。

例えるなら弱い ケモンを最初に出して、何もさせずに戻して経験値だけを得るみたいな感じwww。

テラナイトwww。

完全なお荷物状態です。本当に（ry

敵さんがいないとも限りませんし、一応警戒した方がいいでしょうね。

ならば。

「どうもワタス、メリー、今あなたの上と下と右斜め後ろに居るの
wwww。」

勇者達が来た方向に向かって話しかけてみましたwwww。

「なっ、どこからだ？」

和泉にホールドアップされている人には声を出せないですよね。

べっじやら敵さんは、もう一人居たようですwwww。

「エビフライでご機嫌とつたつもりかア〜！せめてトンカツよこせや！トンカツトンカツトンカツトンカツトンカツトンカツトンカツうめもんせー。『ケータケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ！』」

「うわああー！俺が悪かった。ゆ、許してくれー。」

テレットー

「貴様の秘穴を突いた。これで貴様の足は貴様の意志に関わらず勝手に動く、しかし少しでも動いたらボンツだwww！シャーオツ、ウーッシャツ！」

「あなや！」

ドタン！

ボタンと大きな音がしたと思ったら、大男がぶっ倒れてましたww
ww。

やっちまったぜWWW。

さて、剥ぎ取りますかW。

「あ、部位破壊忘れたWWW。」

「ま、いいか。」

アイテム袋と少女とお金を入手した。

表示がアバウト過ぎW。

ちよ、どこに居た？この子。

「ポケットですが何かW？」

人の心読むなWWW。

「なんでそんな所にWWW？」

「いやー、エルフですから当然？、てか簡単に捕まっちゃまった私バツカスwwwww。」

これは、あれだな。

よくあるパターン。

ある一定のイベントをこなしたり、フラグを立てたりしたら手に入るパーティーメンバーみたいなwwwwwww。

そういう奴はだいたい魔法が得意だとか、素早さが高いとか、手に職がありますみたいなwww。

見せてもらおうか、新しいメンバーの性能とやらを。

「私は、大魔王を倒すために仲間と旅をしているんだよww、君の力を私に貸してはくれまいかwwwwwww？」

「だが、断る W W W W !」

「知らないカボチャヘッドに、ついて行っちゃ駄目ってお母さんが
言ってたもん W W W W 。」

「うっそぞ、釘バット振り上げないで、殴ろつとしないで。あっ、
アーー！」

仲間が1人増えました W W W 。

いよいよ作戦決行ですねww。わかりますww。(後書き)

エビフライじゃなくて、えんびふらい。

相変わらずの妙なテンション、筆者です。

やっちゃまった。

ついに『』を使っちゃまった。

いや、あの音楽を思い浮かべてもらいたくてつい。

かっとなってやった後悔はしていない。

あと、こんな駄文を読んで下さる方が意外と多くてビックリです。

友達のガリバーに、

「閲覧数なんて精々100がいいところだww。」

さらに友達のゴツドクには、

「お気に入り登録？笑わせるなwww。アホが氏ねwww。」
と言われて、鬱だ死のう状態になっていたわけですが、いつの間にか閲覧数が650超え。
お気に入り登録者が5人以上。

うそです。（微妙に）見栄張りました。

閲覧数は600ちょっと、お気に入り登録者はお一人様です。

お気に入り登録して下さいたお方、ありがとうございます。

電話越しに歌を歌いましょうかア!?

家の猫に、なんだこいつキメエみたいな目で見られたので自重します。

これからも頑張って更新していきますので、よろしくお願いします。

楽しい大魔王さんの生活1（前書き）

小説情報をよく見てみたら勇者達と大魔王さんを描くみたいなのが書いてありました。

そうでした。

この話は、2話辺りに入れるはずだったのですが、自分で書いててこの話を忘れてましたねww。

すいません。

気を取り直してござ。

楽しい大魔王さんの生活1

どうも、大魔王ですwww。今何をしているかと言つと、セリフの練習です。

「よくぞ、ここまでたどり着いたな。」

「来たな。愚かなる勇者共よ。」

「さあ、来るがよい。」

どれが一番大魔王っぽいかな？

「三番目なんてフレンドリーな感じで良いんじゃないですか?。」

「ああ、駄目駄目。三番目は馬車の仲間を呼び寄せて回復してやる羽目になるから。」

「では、一番目は」

「ああ、一番目も駄目駄目。あのセリフは実際に言ったらセリフが
終わる前に確実に斬られる。」

「そうですね?」

「じゃあ、実際に言ってみるよ。」

「よくぞ、こ」

ズバツ!

「痛あゝ!」

「ちょ、ホウキで俺にダメージ与えるとか、化け物か!?」

「はっ、すみません。つい斬りたくなっちゃって。」

「いくら、斬りたくなっただからって主を斬る部下がいるかwww」

「ここにいますか。」

「何か？」（あの口調ではない）

「うん、正直なのは良いことだねwww。」

正直というか天然というか。

よくわからんけどwww。

ちくしょう、袈裟斬りになんて大魔王になってから初めてされたわ
www。

クラッ。

バターン！

「きゅ、救急箱。」

「し、死ぬ。」

どうみても出血多量です。本当にありがとうございましたwww

「だ、大魔王さま？」

「し…ぬ。はやく」

「！、分かりました。ちょっと待ってて下さい。」

ダッ！

「すぐ戻ります。」

「できるだけ早く頼むぞ！」

10分後

「ま、まだかよ。死んじゃうよおw。」

30分後

「だんだん寒くなってきた。」

3時間50分後

「もう、ゴールしてもいいかな？」

5時間52分後

ガクッ！

大魔王ハタヤマ死亡ｗｗ。

そんな装備で大丈夫かw

～完～

ガバツ！

「なわきやあるかいｗｗw。ミキヤマめ裏切ったなｗｗw。」

人物紹介

ジオルダン・ミキヤマ

性別 女性

性格 天然と真面目が7：3くらいの割合。

顔立ち か、可愛い過ぎる

戦闘力 ホウキで主（第一形態）を斬れるくらい

職業 魔王兼大魔王側用人

特徴 紺色の髪、料理が得意

詳細 何となく魔王をやっている人生に満足できず、大魔王を募集した結果、ハタヤマがやってきた。
名前はハタヤマが適当に付け直した。

応接間から音が聞こえる。

奴はあそこかww。

「ミキヤマかーくーww!」

えっぐ、えっぐ。

そこには、泣いてる魔王がいましたwww。

「パトラッシュ、僕もう眠いんだ。」

「駄目え！死なないでネロオ〜！」

ぐすっ、ぐすっ。

「あー、」

「ネロおー！帰ってきてー。」

ランダースの犬

〜完〜

「ぐすっ、スン、スン。」

「すみません。」

「ぐすつ、はい？つて大魔王様じゃないですか。
こんな所で何を？」

「いやー、6時間程も何してたの？」

「応接間に薬をとりについたら丁度見逃してた ランダースの犬の
後半部分がやってたので見入ってました。」

「そう。」

「今から美味しいご飯を作りますからね。」

そう言ってミキヤマは階下に消えて行きました。

「…。僕もう眠いんだ。」

バタッ！

「大魔王様！」

「ムニヤムニヤ」

「大魔王様！！」

「私の眠りを妨げる愚者は誰ぞ？」

「魔王です。起きて下さい。」

「お願い。あと5年だけ。」

「あと5分みたいに言わないで下さい。あなたはどれだけ寝るつもりなんですか。斬りますよ?」

「寝る子は育つ。」

「いい子ですから起きて。」

ユサユサ。

「...。」

ユサユサユサ...

殺気?

寝返りうつとくかWWW。

ザクッ！

「うおおー！」

「ちっ、外したか。」

どうみてもさっきまで頭があつた位置です。
本当に（ry

「リアルで命とりにきたよこの子www。」

「目は覚めましたか？」

「は、はい。」（ガタガタ）

（夕食時）

ポトフっまっまW W。

「今日は勇者が1人も来なかったねW W W。」

「いえ、ホウキで3人程やっておきましたよ。」

「そ、そうか。」

もう少しで今日の犠牲者が4人になるとこだったんだなW W W。

最強の守護神兼、最強の破壊神と言っわけですね。
わかります。

勇者に倒されるのが早いか、魔王に（誤って）やられるのが早いか。

「だが、あたらなければどつとどつことではない。」

「次は外しませんよ？」

「∴。」（ガタガタ）

ちなみに、セリフは勇者がミキヤマを超えて来たら考える事にしましたwww。

そんな奴が本当に来るか分かりませんがねwww。

楽しい大魔王さんの生活1（後書き）

相変わらずの妙なテンション、筆者です。

閲覧数、699回、お気に入り登録者、お二人様。

ヤッホーイ

感謝感激です。

いやー、お気に入り登録とかされるとまじでテンション上がりますねえ。

皆様、こんな作品を読んでもいただき、誠にありがとうございました。

これからも更新がんばります。

作戦成功？（前書き）

サブタイトルを決めるのにどれだけかかったことか。

さて、今回は設定の「くくく」一部を公開します。

今回の設定が後々いろいろと関係してくるわけですので、色々と考えてみるのも楽しいと思います。

では、さようなら。

作戦成功？

「エルフとは、珍しいですね。」

私は見たことありませんでしたよ。

「エルフはおとなしく、なおかつ数が少ない種族ですから。」

「普段はユニコーンに乗ったりしてます。」

「なるほどwww。一族みんな ナージなんですねwww。わかります。」

「MSじゃないですよwww。」 「MSに乗れたとしてもザク改が
いいところですw。」

「エルフも大変なんですねwww。」

「まあ、私はエルフと人間と悪魔のミックスなんですがね。」

「三種類の血が流れているんですか？」

「ええ。」

ということとは、この子は物凄い潜在能力を持っているかも。

説明しよう。

それぞれの種族にはそれぞれ得意な分野がある。

人間 あらゆる分野でそこそこの能力を得る事ができる。

妖精 素早さがかなり高く、回避能力が非常に高い。補助系魔法が得意。

天使 力、素早さ、防御などで非常に高い水準に達する。ただし、

魔法は使うのも受けるのも苦手

悪魔 力が強く、攻撃魔法が得意。

エルフ 素早さが非常に高く、回避能力が高い。回復魔法が得意。

魔族 何か1つの分野が飛び抜けて高い。ある一定以上のレベルに達すると急激な成長をみせる。(大魔王さんはこれらしい。)

魔物 得意分野と苦手分野が非常にはっきりとしている。

ニュータイプ 知らん。

シャアアズナブル 赤い彗星。

とまあ、こんな感じですよww。

つまり、目の前にいる少女は、ほぼ万能の能力を内に秘めてるといっわけです。

これで大魔王に勝つるwww。

さて、和泉を迎えに行きますかww。

ちなみに、この子のレベルは5で、私は11、和泉は12です。
なぜかって？

スライムだよ。スライムw。

ガリ男が倒したスライム。
レベルは63でしたwww。

経験値美味しかったですwww。

「サイド和泉」

「フリーズ。」

「くっ、ダンボールで俺の注意を逸らした隙に背後から近付くとは、なかなかやるな。」

「黙れ。」

私は銃口を後頭部に押し付ける。

「貴様は黙って聞かれた事に答えればいい。」

「無限バンダナはどこだ？」

Wそんな無茶なW W。

「そんな事をこの私を知るわけ。」

パシユン！

「ひいッ！」

弾丸が肩をかすめると、男は情け無い悲鳴をあげて震えだした。

「言う、言うよ。無限バンダナのはわからないが、魔王城の地下5階宝物庫に凄い宝があるらしい。」

「そうか分かった。」

「では、お前はもう用済みだ。」

「ま、待ってくれ。俺はちゃんと聞かれた事に答えた！」

「ゆ、許してくれ。」

「来世にご期待下さいｗｗ。」

「ま、待つ」

パシユツ。

ドサツ！

ちよ、ｗｗｗｗ和泉ｗｗｗｗ。

なんて鬼畜ｗｗｗｗまさに鬼ｗｗｗｗ悪魔ｗｗｗｗ。

だが、そこに痺れる憧れるウウウ！

「レン、安心しろ。麻酔弾だ。」

「ただ、奴らに撃つたのは対魔物用麻酔弾だから、3日は目が覚めないと思うがな。」

なんてツンデレ、さすが和泉www。

3日後に奴らは生きてる事の素晴らしさを知るでしょうwww。

「ところで、その子は？」

「拾った、エルフ、腹減った。」

「なるほど、奴らに拉致されていたエルフを助けたというわけか。」

理解がはやーい。

片言なのにはツッコんでくれないんですねwww。

「君の名前は？」

「私はリーネ。エルフと人間と悪魔のミックスです。」

「私には名乗らなかった名前を和泉には名乗りました。」

つまり私は話す価値すらないって事ですねwww。
悔しいのうwww悔しいのうwww。

「私の名前は影宮和泉だ。よろしく頼む。」

いまだにクールwww。

やべ、まじ惚れるWWW。

「なんで、戦闘は終わったのにまだ和泉はクールなのWWW？」

「クール？私が？」

「うん、恐ろしい程クールで格好いいよ。襲っていいWWWWW？」

「い、駄目だWWW。」

「久々の対人戦だったからな。まだ体が緊張しているんだろう。」

「ところで、こっちはショットガンを入手した。」

「そっちは何か入手したか？」

「ハンドガン二丁とナイフ一つ。あと、薬草にテントにフライパン、出刃包丁に釣り竿くらいかなwww。」

野宿する時に使えそうなものばっかwww。

近くに川もありますので新鮮な魚は手に入ります、いざとなったら町に行けばいいですね。

「ということで、町の外周を回りながら経験値とお金を集める事にします。www」

「「うは、把握www。」」

「ほら、リーネもカボチャ被ってwww。」

「いや、リーネにはダンボールがよく似合うwww。」

「私はパンダの被り物でいきますwww。」

「被り物持参だ と!」「」

今まさにレベル上げの旅が始まるつとじていましたwww。

作戦成功？（後書き）

相変わらずの妙なテンション、筆者です。

以前も書きましたが、この小説の世界観はとある小説の世界観と似ている部分が多々あります。

しかし、断じてパクリではないwww。

神の作品にケチをつけようなんて考える愚か者ではありませんww。
w。

仰せの通りに！

と、話が逸れました。

皆様、このような作品を読んでいただき誠にありがとうございます。

え？いい加減しつこい？

ええ、私はしつこいですともwww。

これからも更新がんばりますので、この小説をよろしくお願いします。

楽しい大魔王さんの生活2（前書き）

このタイトルシリーズは外伝なのか？

よくわかりませんなあ。

これから、少し億劫な平日ですね、
だからこそ1日1回は必ず、更新するようにします。暇な時に読んでね。

もし、更新がなかったら

筆者は風邪っぴきでしょうww。

楽しい大魔王さんの生活2

あれから三年の月日が流れた。

大魔王ハタヤマは魔王の手によって倒され、世界に平和が戻った。

そしてレン達のパーティーは解散し、3人とも以前の生活に戻っていった。

全ての戦いは闇の中に消えていく。

彼らはいったいなんのために戦っていたのか。

戦いが終わった今、彼等がどこに行くのか。

その間に答えられる者はどこにもいない。

そんな装備で大丈夫かw

〜完〜

また、このパターンかww。

どうも、大魔王です。

私は今、大魔王の間で威厳たっぷり勇者を待っております。

だが、誰一人来ないというww。

その理由は、魔王兼大魔王側用人のミキヤマが全員ぶっ飛ばしてるからでしょう。

この前戦いの様子を見ていたのですが、ホウキで刀を折ったのには
ワロタwwwwww。

しかも、その刀は祝福されてましたからねwww。

祝福の魔法の効果で基本性能は5倍以上に跳ね上がったはずなんですけど…。

一瞬で使い手を刀ごと真つ二つ！

ばかな、あのホウキは化け物か？、恐ろしくてたまらんwwwwww。

普通、祝福された武器に対しては、同じく祝福された武器で挑むか、自分の全ての魔力を武器に流し込むと造ることのできる（回数制限あり、作り手のレベルと使用した武器などにより変動するが、0〜2回がやっと。（武器が耐えきれなかった場合も失敗とみなす、応用編として防具に魔力を流し込む事も可能））

神具で挑むのがセオリー（魔法の効果を無効化してから戦うなんてやり方もある。）なんですが、なんせホウキだからねwww。

チートすぎるwww。

だがこれでは、ミキヤマばかり強く見えて、読者の皆さんに「なんだこのハタヤマっての、実は弱いんじゃないか。」

って思われてしまうwww。

ここらで俺の強さをアピールしておく事にしよう。

いや、仮にも大魔王なもんで、面接の時にミキヤマに一応勝つてはいますよwww。

「おい、ミキヤマあー！」

「呼びましたか？大魔王様。」

「恐つ、『おい』の辺りで既に横に居ましたよwww。」

「お前の名前は今日から東方腐敗なwww。」

「なつ、せめて東方不敗にして下さいよ。」

そこかよwww。

「冗談だよ。冗談w。」

「お前の名前は今日からレーニア・アルトワークス・岡田なwww」

W。
「

「異論は認めるが、拒否権はないからWWW。」

「わ、わかりました。」

「レーニア・アルトワークス・お、岡田ですね。」

「あ、長いからレーナって呼ぶからWWW。」

「いやあ。ミキヤマ弄りは楽しいなあW。」

「おっと、今ではレーナ（レーニア）でしたねWWW。」

「早速だが、レーナくん、朝御飯の支度をしてくれたまえWWW。」
「

「…。わかりました。」

レーナが何か言おうとしたようですが、結局言わずに歩いていきました。

なんか、罪悪感を感じー

ねえよwwwww!

だって大魔王様な訳ですからwww。

さて、レーナも追い払った事だし、飯が出来るまで魔王城のパトロールに出掛けますか。

俺の部屋（大魔王の間）は勿論最上階にあります。（ちなみに魔王城は三階建てです。）

ただ、地下は十五階あたりまでありますので意外と広いです。

勇者は、まさか三階に俺の部屋があるとは思わないから、地下への階段を見つけたら、すぐそっち行くんだよねwww。

wバカスww。

せめてエレベーター使えwww。

そう、魔王城にはエレベーターがあるのさwww。

三カ所（玄関前、東階段横、西階段横）

更に、トイレはそれぞれの階に一つずつ。（地下）

地上には一階、二階にあります。

大体はワタスが作らせたwww。

「もうちょっとしたらエスカレーターも付く予定ですwww。」

なんて言っていたらいつの間にか玄関前にいましたw。

「うん？俺の宝箱が。」

そう、巧妙に隠してあった俺の宝物（秘）が見当たりませんww。

プチッ！

「勇者の野郎！」

見つけたらぶっころす！

ガラリ。

「あ、大魔王だ。」

「あ、勇者だww。」

「大魔王覚悟！」

「うわ、こわーい(棒)」

勇者(笑)が剣を抜いて襲いかかってきましたwwww。

ガシャシャシャン！

「ちよ、」

「見るがいい！ハタヤマの雷を！！」

ガトリングガンが火を吹くぜ！

轟音WWW。

「フハハハハ、見る。勇者がまるでゴムのようだ！」

ガトリングガンをしまつと、そこには変わり果てた勇者の姿が…。

どうみてもオーバーキルです。本当にありがとうございましたWWW。
WWW。

勇者さまあWWW。

「私のコレクションを奪おうとする者には容赦せん！」

勇者さんを少し離れたゴミ処理場に送ると、俺は再び歩き出した。

「飯食って、寝よう。」

おまけ

「私に内緒でこんな物を。許しません。」

バキッ！

レーナによって宝箱の中身が粉碎されたようです。

勇者 エｗｗｗｗ。

楽しい大魔王さんの生活2（後書き）

どうも、相変わらずの妙なテンション、筆者です。

作品閲覧数が大分増えてまいりました。

身の引き締まる思いです。

これからも頑張らせていただきます。

ひゃっ

名前なんて飾りです。

すみません。

チート？ いいえケファイアです。(懐かしい)(前書き)

どうも、この話は昨日の内に投稿するはずだったのに、ついすっかり

寝ちまいましたw。

すみません。

気を取り直して、ではどうぞ。

チート？ いいえケフィアです。（懐かしい）

レンのレベルが上がった。
和泉のレベルが上がった。

どっもwwレンでございませすwww。

「恐ろしい程のペースでレベル上がり、今では立派なレベル10、これで大魔王なんて楽勝だ。さあ魔王城に乗り込むぞ。」

「ごめんなさいww。嘘ですwwww。まだ、たったのレベル25ですwww。見栄張ってすいませんwwwww。」

「いやいや、凄いもんだよ。たったの3日でレベル25にまでなるなんて。」

「そう言ってくれるのは和泉だけだよ。結婚してwww。」

「い、駄目だ。」

「和泉さんは渡しません!」

「ククク、出て来たな。リ、ーネええええ!!」

「ベア リーチエみたいな口調は止めて下さい。」

「くっ、この3日間でシッコミ時の冷淡さがかなりレベルアップしてやがるww。」

そう、この子は和泉に対しては優しくて、とてもいい子なのですww。

私にもその優しさを分けてくれたらなあ…。

スッ。

リーネが手袋をして（ニコニコ重要）何かを差し出してきました。

うん、なんだこれ？

キャンディ？

その飴を手にとったところ、頭の中に直接響くような声がWWW。

『私のおじいさんがくれた。初めてのキャンディ。それはっ…っ！』

「っわあ〜っ！」

バキッ！

キャンディを地面に叩きつけました。

「ハアハア。ハアハア。」

危うく頭が4歳になるところだった。

「リーネえ、何するんですか？（いい笑顔）」

「優しさのお裾分けです。」

なるほど、私に対する優しさは噂のキャンディというわけですね
ww。
ww。

和泉がこんな状態（涙目＋上目遣い＋メイド服）の私をほっとく訳がないだろうwwww。

えっ、何故メイド服かって？

罰ゲームだよww、罰ゲームwwww。

今日やったゲーム（御想像にお任せします）に負けたからって和泉に無理やり。

まあそんな事はどうでも良いですねwwww。

さあ、自分の軽率な行動を悔いるがよいわwwww。

あれ？和泉は？

「お客さんみたいだな。」

はい？

「容赦はしません。」

「目標確認。」

「バラバラにしてやんよ。」

レベルアップした力を試してやるうじゃないですかwww。

「魔物は消毒だあゝ！」

私はもちろん釘バット片手に突っ込みますともwww。

「アハハ、モビルスーツの性能を生かせぬまま死んでゆけえ！」

サッ。

「ファイガ」「アイスガ」「サンダガ」

「あはははは。」

狙い撃ちにされますたWWW。

だがしかし、私に魔法など（あんまり）効かんだ。

「どじやっ。」

釘バットが唸る！

ぐキヤッ！

「あべしっ。」

「フハハ、まず1人。次はどっちの番かな？」

「くっ、魔法が効かないだつ。」

「ならば、必殺。」

「朝のネスカフェ・挽き豆包み製法！」

魔王の使い魔Cが蘇った。

「ちよ、WWW自重WWW。」

「B、C、奴にジェットストリームアタックを掛けるぞ！」

「了解。」

「行くぞよ、じえつと」

「安心しろ、一瞬だ。」

パシュン。

「ぐわあ。」

ドサッ。

「あ、兄者ああ〜！」

「ヘッドショット命中。推定ダメージ11200。」

またお前がww、というかお前は呂布かwwww。

「まとめて消えなさい。ホーリーインパルス。」

何十もの白い光弾がお二人様に多段ヒットしましたww。

「ギャアアア〜！」

敵さん、ざまあwwww。

光弾が消えるとそこには無惨なry

って、ちょっと待てWWW

考えてみると、

このパーティー強すぎWW。

クソワロタWWWWWWW。

繰り返す技が大体一撃必殺って、なんてチートWWWWW。

「…。」

私の装備、釘バットだ。

「…。」

どうみても私がお荷物です。本当にありがとございましたwwww。
w。

鬱だ。寝よう。

『魔王の使い魔』（レベル60）共をやっつけた。

リーネのレベルが上がった。

やっぱりレベルは60でしたかwwww。

レベル60をものもしない低レベルパーティー！。

なにそれ怖いwww。

これが主人公補正つてやつですねwwwわかりますwww。（主人公が一番活躍してないのは内緒。）

襲ってきた魔物をこんな感じ（主に和泉のヘッドショット）で撃退しながら私達はネズミーランドを目指すのでしたw。

え、魔王城？

ネズミーランドのすぐ近くにあるそうですが何かwww？

チート？ いいえケフィアです。（懐かしい）（後書き）

相変わらずの妙なテンション、筆者です。

閲覧数が1000を超えました。

わーい。わーい。

感謝感激のキワミ アーッ！

自分で打ってて、すごい浮かれようだなあと思いますね。

はいw。

皆様、こんな作品ですが、これからまぐろぞろくへ。

え？ お前の文は『、』が多いって？

よく言われますが何かw w。

それでは、また。

はやまるな！選択肢はよく考えよう。（前書き）

遅くなってすいません。

朝に前編を投稿、夜に後編を投稿という形にするはずだったのに…。

今回の話は前編です。

皆さんも、選択肢はよく考えましょう。

はやまるな！選択肢はよく考えよう。

夢の国、ネズミーランドにやってきたよWWW。

「僕、ヒッキー。」

「私、ミニート。」

「僕はプーさんだよ。甘い汁吸いたいなあ。」

「きゃー、マスコットのヒッキーとミニートとプーさんですよ。可愛いですね。和泉さん。」

「リーネ、気を抜くなよ。ここはただのテーマパークに見えるけど、大魔王の支配下にある所だから。」

和泉が真っ白な恐竜のぬいぐるみを抱いてそう言う。

可愛いじゃないか、くそっ。

緊張感の欠片もねえwww。というツッコミを入れたら負けな気がする。

「和泉さん！和泉さん！どこからまわります？」

「まずは、ヒッキースパイラルかな。」

ヒッキースパイラルwww。

一度はまったら、なかなか抜け出せないって訳ですねwww。わかりますwww。

「いやあ、ここはお化け屋敷でしょｗｗ。」

「お化け屋敷も楽しそうですね。」

「ね、和泉さん。」

「却下です。」

「え？」

「え？X？ネタ？ｗｗｗｗ。」

「お化け屋敷は、危険な気がする。」

「……。」

「和泉、もしかして怖いのか？」

「ちちち、違うー！」

「メタギフリークでクールな和泉にもそんな弱点があったとはww」

「ち、違うと言ってるだろ。」

「考えてもみる。中は暗いんだ。前が見えないんだぞ。その闇の中にはどんな罠が待ってるかわからないんだぞ。」

和泉が恐竜のぬいぐるみ（あどけない顔の首長竜）をぎゅとしなが
らそう言っ。

「罨なんてまさかwww。」

「テーマパークで気を付ける事なんて、黒の組織の取引を見ないよ
うにすることだけだよwww。」

「レンはお化け屋敷の恐ろしさを全くわかってない。」（ガタガタ）

「あそこは酷い所だよ。」（ブルブル）

全く、和泉は怖がりですねww。

「わかりました。では先に行って、お化け屋敷が安全かどうか見てきますwww。」

「…。」

「無事帰ってきたら結婚して下さいねwwww。」

「…、わかった。気を付けて。」

「…………。」

は？

いやいや、まさかねww。

聞き間違いでしょうけど、念の為にもう一度聞いてみることにしま
しょうかww。

「い、今『わかった』って言いませんでした？」

「言ったよ。それがどうかした？」

「いいえ、

ついにフラグがたったぞお〜！！

クールな和泉を攻略だああ〜い！

「わかった。1500秒で終わらせる。」（超早口）

意外と長いなWWW。

「じゃちょっと行って来ます。」

ダッ！

「目いっぱい飛ばせえええ〜！」

…ジジジジジジジジジジ

「…。」

「和泉さん。本気ですか？」

「私は本気だよ。」

「レンはお化け屋敷の恐ろしさを理解してない。」（ブルブル）

「そ、そんなに怖いんですか。」

はっはっはっはー、月光蝶である！

「リーネの生体データを採りつつ、神の国への引導を渡してやるっ
っ！」

もう和泉はもらったも同然さア W W W W W W W W W W。

待ってる和泉い！
お化け屋敷をさっさと攻略して、和泉も攻略してくれるわ！

と
思
っ
て
い
た
時
期
が
私
に
も
あ
り
ま
し
た
。

はやまるな！選択肢はよく考えよう。（後書き）

お米食べろ！

相変わらずの妙なテンション、筆者です。

突然ですが、最近凹んだ話を一つ

友達から来て凹んだメール

無題

お前の小説には、感想が一つも来てないな。
さすが、（筆者の本名）クオリティ。

永遠に寝てろ。

追伸、晩御飯は唐揚げだった。

）END（

酷くね？

皆さんも悪質なメールには、ご用心下さいね。

毎回、訳わからん後書きでスマソ。

■最近のアトラクションは高性能(前書き)

更新が遅れてすみません。

リアルに風邪引きました。

まさか、丑三つ時に砂浜を散歩しただけで風邪を引くとは

あ、これじゃあ風邪も引きますね。

書いてて、気付きました。

完全に自業自得です。

本当に（ry

これから、また更新頑張っていきたいと思います。

最近のアトラクションは高性能

こちら ネーク、幽霊屋敷へ潜入したWWW。

今すぐ携帯の電源を切れ！

ちよ、WWW大佐の第一声がこれとか、なんてムリゲーWWW。

「実はこの前、和泉くんの部屋から男が出て来るのを見てしまったんだ。」

その、何というか とても親しげな様子だった。すまない。作戦中に言うことでは無かったな。」

こ、殺す気がWWW！？

ある意味、死にかけたわWWW。

いつまでも、　ネークと呼ぶのは危険だ。

これからは、君の事をレンと呼ぶ事にする。

「了解だ。」

では、レン。
幽霊屋敷を細部に到るまで全てをまわって、金目の物を集めるんだ。
全ての部屋をまわらなければ、脱出は不可能だ。

幽霊に出くわしたら、パワーストーンを握りしめるといぞ。

では、任務を遂行しろ！

「わかった。」

「いやー、手の込んだアトラクションです」

『ドンッ!』

「ガッ!?!」 (後ろ向きに吹き飛ばされて空中一回転)

ズシャッ!

「一歩目からクレイモアだ」と。

どうも、レンですwww。

いきなりですが、満身創痍です。

これでは、天翔龍閃が出せないwww。

でも、九頭龍閃は出せますwww。

とりあえず回復しますねwww。

「薬草、薬草、薬草薬草薬草……。」

「ハアハア。」

やっと全快ですwww。

何て危険な場所なんでしょうかww。

この幽霊屋敷は意外と広くて、暗いです。ぶっちゃけ、ほとんど何も見えませんww。

目が慣れて幾分かは見えやすくなりましたが…。

「こ、怖い。」

和泉の言つとおり、お化け屋敷ってこんなに怖かったんですねww。

「誰か助けて、和泉 リーネえ〜！」

レンは仲間を呼んだ。

…。

しかし、誰も来ない。

「もうやだ。」

一刻も早くここを出て和泉に土下座をしたいのですが、入り口方向からは青白い光が非常にゆっくりとしたペースでやって来ますので、先に進むしかありませんwww。(こんなにシーンとしてたら、普通足音がするはずなのに後ろからはしないんだ。何でだろ。)

あれ？目から水が出てきたぞ。

「グスッ」

後ろの青白い光がだんだん近付いてくるので急いで先に進みたいと思います。

「まずは、この部屋ですね。」

ガチャガチャ

鍵が掛かっているwww。

「ならば、隣の部屋です。」

ガチャガチャ

鍵が掛かって（ry

「まだまだっ！」

ガチャンッ！

鍵が（ry

「開けえ！」

ガチッ！

（ry

ちよ、wwwやっぱムリゲー。

「扉が開かないんじゃない、どうしようも無いですね。」

そう言つて俯いた私の目の前には、亀裂の入った壁があり、その中に錆びた鍵が：wwww。

ラッキーですねww。

錆びた鍵を入手した。

なんか、扉の鍵には小さいような気がしますが。

「どこの鍵なんでしょうか」。

コシ、コシ、コシ、コシ。

足音wwwwww。

姿は見えませんが、どこかから足音がW W。

こ、怖いW W W。

ここで待つ

逃げる

「逃げます」即答W W W。

明らかに『ここで待つ』は死亡フラグですW W W。

ダッ！

⋮

⋮

⋮

コツ、コツ。

カッ、カッ。

どこをどう走ったのか、いつの間にか私は見覚えのない部屋の前に
居ました。

まあ、見覚えがあるわけないんですがねw w。

とりあえずドアに手をか

もうゴールしてもいいかな？
まだだ！まだ終わらんよ。

えっ？部屋に入るか、入らないかの選択肢がおかしいって？

「まあ、とりあえず入ってから考えましょう。」
（アバウトw w w）

ガチャ

ギ、ギギイ、
ボタン。

ガツチャツ。

おまけ

少し前の事

「25分経ちましたけど、戻って来ませんねえ、レン。」

「やっぱり、何かあったか。」

「..?」

「行く。レンをそのままにしておくわけにもいかないからね。」
(ガクブル)

「ロツロツ、ロツロツ！」

「あ、待って下さい。和泉さん。」

カツカツ、カツカツ！

■最近のアトラクションは高性能（後書き）

病み上がりの微妙なテンション、筆者です。

今回の話は書いてて、とあるゲームに似てるなと思いました。

だが、パクリではない。
いや、これはパクリか？

違う。精神が汚染されているから思考がこっとなるだけだ。

つまり、微妙にパクリですwww。

いろいろとすいません。

1人かくれんぼは駄目だけど、リアルかくれんぼ（パクリ）ならいいじゃない。

更新が遅いつて？

大丈夫だ。問題ない。

すみません。調子乗りました。

ちょっと小説の構成を考えながらタイバニ見てました。

面白かったですww。

話がずれましたね。

最近この表現にはまっています。

では、オペレーション、スターゲフィン、ゲフィン！

1人かくれんぼは駄目だけど、リアルかくれんぼ（パクリ）ならいいじゃない。

「ヤバイヤバイヤバイヤバイ」

どうも、大魔王ですwww。

ただいま、二階のトイレの一番奥で震えています。

え？何でそんな所にいるかって？

実は私、かくれんぼをたしなんでおりましてwww。

違う、というかたしなむものじゃねえwww。

いやー、今日の朝、応接間の棚の上に置いてあった招き猫レナのをつつかり割っちゃいましたねwww。

接着剤でくっつけといたんですが、先程の食事（ステーキ＋キャビア）の時に

嘘ですwwwwww。

見栄張ってすいませんwww。

実際はご飯、サラダ、カレイの煮付け、ミソスープでしたwww。

今月は新しいゲームとパソコンを買ったから、魔王城の財政が厳しいのだよww。

話がずれましたね。もとに戻しますwww。

えっと、食事中に接着剤が剥がれて招き猫の耳が取れたんですねwww。

『カタン』と

レーナは棚を背に座っており、その時は気付いてない様子だったのでそそくさと食事を切り上げて、ゆっくりと後ずさりしながらレーナに

「は、流行りの服は嫌いですかあ〜!?!?」

激しく間違えたWWWWW。

まさか予測変換の一番上にでてくるとはWWWWW。

実際には

「腹がちよつと痛いような痛くないようなどつちでもないような気がするんで今日はもう寝ます。探さないで下さい。」（非常に早口）

でしたwww。

「はい、よくわかりませんが、お休みなさい。」

「その言葉を待っていた。」

扉を閉めて走り始めたワタスの耳に『ガチャーン』という不吉な音が聞こえてきたのは、それからすぐの事でしたwww。

普段は招き猫を割ったくらいでは怒ったりしないレーナなんですが、嘘を付いた事がばれると鬼神へ変貌します。

招き猫が割れちゃった 片付けよう 接着剤の跡？ 様子がおかしいと思ったらあの野郎〜！！ 鬼神化。

みたいなwww。

確実に されます。

某フリーのカメラマンさんよろしく されますwww。

慌てて自室の身代わりロボットのステファニー（本人そっくりに変身でき、簡単な会話なら可能）をリモコンで起動し、設定をノーマル、分散、集中、回避、非常用のうちの回避に設定。

ステキ大魔王クオリティの前には、いくらレーナといえど撃破するのにかかるはずだ。と思ってたんですが、

「は 反応がロストした。」

瞬殺されますたWWWWWW。

くそっ、誰だよ時間が稼げるなんて言ったのwww。

どうみても私ですwww。

本当にry

だが、まだ終わらんよ。

レーナはだいたい夜10時半には寝ます。

フフフフ、眠ってしまえばこっちのもんさww。

眠ってる隙に『 あ あ棒』(未来の国からある1人の少年を護衛しにやってきたロボット、こう書くとーミネータみたい、『Th e 青ダヌキEX』の道具の1つ)を使って、怒りを緩和してやりますよwwww。

10時半まで…

あと4時間。

たったそれだけだ。

たったそれだけで我々は勝利を手にできるのだ！

というわけで私はホフクしたり、ダンボール被ったりして城中を逃げ回っているわけなんですわwwwwww。

まさに、リアルかくれんぼ

…。

どうみてもパクリですwww。
ほ(ry

え、
城の外に出ればいいじゃん
つて？

w。
城の外には数えるのも面倒になるほど罫がたくさんあるのだよww

ちなみに即死級です。

仕掛けたのはレーナなんで彼女なら罠にはまらずに安全地帯にたどり着けるんですが。

俺なら2回は確実に死にますね。

対空装備もバツチリ！

飛んでく事も出来やしねえwww。

だから勇者さんたちはここに来るまでに棺桶に変わるわけですね、はいwww。

タンタンと誰かの足音が聞こえます。

幻聴でしょうか。

いっそ、あの足音の前に私を連れて行って。

くそっ、このネタがわかる人がどこかにいないものかWWWWW。

ちなみに、某ホラゲーだWWWWW！

「あの足音は……。」

タンタンツという軽めの足音がこちらに近付いて来る。

「ここは聖域、魔王は入れない。」

大魔王入ってましたねwww。そういえばwww

「俺は 最後まで諦めない！ 明日はアイツの誕生日なんだあああ
！」

なんという死亡フラグWWW。

しかし足音はトイレを素通りして、下の階に降りていきました。

その後玄関付近をウロウ、

待て待て待て、あんな軽い足音だったのに、なんでこんなに大きく聞こえるんだ？

まさか、フエイク！？

充分にあり得る。

魔法か何かで偽の足音を作り、自分は立ち止まる。

そして、俺が何か言葉を発するのを待つ。

相手の恐怖心を煽る良い作戦だ。

だが、種がわかればどうということはない。

ここで俺が何も喋らなければ…

危険は去る！

「招き（猫がゴミのようだ！）」

くそwwwwwwやっちまったwwwwww。

俺の人生オワタwwwwww。

やはり足音が近付いてくる。

タンタン、淡々と。

足音に深い意味はないwww。

ダジャレだった？

いいじゃまいかwwwwww。

sideレーナ

身代わり人形を焼き払った私は二階のトイレに来ていました。

「おそろくこの辺に…」

いちおう魔法で分身を生み出し下の偵察に行かせると、トイレの中を確認する事にしました。

いくら大魔王様でも、こんな所には隠れないと思いますが、念のためです。

「あれほど嘘は駄目だって言ったのに……。」

みんな言うように、確かに嘘は人間関係を円滑にするかもしれませんが、

しかし、そんな関係は所詮薄っぺら。

偽りでしかありません。

この意見だけは変えられないので、大魔王様からはよく頑固だと言われます。

人は綺麗事だけでは生きていけないという事もわかるのですがどうしても変えられない、私の根本に深く関係する事なのではないでしょうか。

話がずれましたか。

肉まん食べたいな。

私がそんな事を考えながらトイレに入ろうとした時でした。

「猫がゴミのようだ!」「()は聞こえない(ややこしい)()」

「やはりここでしたか。」

私が臨戦態勢をとると同時に窓が割れ、何か落ちていく音と、よくあるRPGのエンディング曲のような音が。

しかし、私は騙されません。

この程度で倒せる大魔王なら誰も倒そうと躍起になったりはしませんものね。

私は個室を1つ1つ見て回る事にしました。

1人かくれんぼは駄目だけど、リアルかくれんぼ（パクリ）ならいいじゃない。

命は何にだって1つだ！

相変わらずの妙なテンション、筆者です。

今回の投稿が遅れたのは、何もタイバニ見てたからじゃないぞ。

これからの三話分の構成を考えてたのさ。

物語もいよいよクライマックス！

最終回までもうあまり時間が無いぞ！（うそ）

嘘ついちゃ駄目って色んな人が言ってた。

く近所の子供く

ならば、（内を直そう。

（冗談）

どうみても屁理屈です。
本当にありがとございましたwww。

ちなみに、

よく考えてみるとサブタイトルの『リアルかくれんぼ』って…

これ、ただのかくれんぼじゃんwwwwwwwww

最終確認画面でサブタイトルみた時に気付きましたwwwwww。(ガ
チで)

では、次回でまたお会いしましょう。

あと、お気に入り登録ありがとうございました。

それでは。

2人
3人。

一番やっかいなエンドは、やたら長いイベントの後死亡するパターン（前書き）
い、忙し過ぎて死にそう。

合間を縫ってなんとか投稿しましたが…。

今回は短いです。

では、どうぞ。（ちゃんと後書きも読んでね。）

「一番やっかいなエンドは、やたら長いイベントの後死亡するパターン

ちとと

ちとと、じゃねえよwww

どうも、レンですwww。

見事に閉じ込められましたwww

「開けて、開けてえー！」

ドンドンと扉を叩いても、誰も助けに来てくれない。

え？こついつ時こそ、見つけた鍵を使えよって？

もちろん試したさ。

だがな、

何度やっても鍵穴に合わんだWWW。

仕方ないので、部屋内を探索したいと思います。

選択肢

t i m e 6 0 s

机

奥の戸棚

鍵 妙な装置（絶対に使ってはならないと書いた紙つき）

まてまで、t i m e 6 0 s ?

どうみても制限時間ですw w w本当にありがとございましたw w
w。

某へタレのように

「ヤバいやバいやバいやバい。」と言つても思ったか。

こついつ時は慌てたら負けなのさ。

さあ、羊でも数えて落ち着こつ。

羊ってワタアメみたいだよな。

泡風呂の泡にも似てる。

ん、あ…わ？

「あわわわわわわ！」

くそっ、落ち着く事も出来ませんねwww。

「この時こそ携帯電話だ！」

Yahoo!知恵袋

幽霊屋敷に閉じ込められました

もう泣きそつです。

鍵も合いません。どうすればいいですか？

ベストアンサーに選ばれた回答

泣いたっていいじゃないか。

人間なもの

みつお

そっちかよ W W W W W W。

遠回しに諦めろって言われてるよじんな気がしてしょうがないわ W W W W W W。

ん？よく見ると続きがある。

PS・羊を数えるのは寝るとき。

和泉

あー、そういえばそうでしたね W W W W。

こちらの動きが丸わかりとは、和泉 恐ろしい子 W W W W。

え、「もっとつつこめよ!」「って?」

だが断る W W W W W W。

さて、そういえば選択肢でしたねWWW。

え、こういう場合の主人公はだいたい最良の選択をするに決まってるって？

だから君は甘いと言っただよ！

『ダレン・ヤン』って小説読んだことあるかい？

なに？

今はそんな事関係無いつて？

まあ聞けよ。

私は小説版を全巻読んだんですが

その最初の方に確か、

この世界はファンタジーではない。

正義は悪に負けるし、人は撃たれれば死ぬ。

絶対の正義なんてものは無いし、平気で悪は蔓延る。

みたいな文があっただんです。（激しく間違ってるだろうけど、ファンの方許してね。）

つまり、

「私がここで選択肢をミスる事も十二分にあり得るわけさ！」

《読者の皆様には特別に正解を教えましょう！》

「謎の装置 鍵の順番で調べればいいのさ！それ以外はBaden
だまっしぐらwww。」

「どっしましょ。時間もお金もありません。」

Yahoo!知恵袋

なら働け！

和泉

全くだwwwwww。

「ここは、机と鍵だああ！」

Yahoo!知恵袋

BadEndフラグがたちました！

現在主人公の方、ざまあwwwwww。

次の次の中から主人公が代わります。

ご了承下さい。

主人公投票

1. 和泉

2
・リーネ

3
・大魔王

4
・ノストラ酒井

5
・ミスターフランク

6
・レーナ

7
レ
ン

一番やつかないエンドは、やたら長いイベントの後死亡するパターン（後書き）

アイデアが枯渴したあああ！

冗談に聞こえんから止めね。

相変わらずの妙なテンション？、筆者です。

最近忙し過ぎるわwww。

なかなか小説を書く時間がとれません。（決してアニメを見るからじゃありませんよwww。）

構成は決まってるんですがね…。

というわけで、誠に勝手ながら更新を二、三日に一回とさせていただきます。

用事が終わったら元の通りになると思っているので、ぜひよろしく。

今回の話は冗談だろwww。だって？

…安心しろ。骨は拾ってやる。(誰の?)

人生オワタ、どうみてもバッドエンドです（ry）（前書き）

今回は最短です！

まあ、タイトルから察してくれ。

今日中に、もう1話投稿出来る（予定は変更になる可能性があります）
す（）と思いますので許して下さい。

人生オワタ、どうみてもバッドエンドです)ry

机の上には何もありません。

「くっ。」

鍵(壁に掛かってました。不用心過ぎwwwwww)を使いました。

鍵穴に合い、扉が開きました。

「なんとか脱出成功ですかねwwww。」

ガチャ。

「さて、この後どうしましょうか。」

「ここは、番外編という形にして誤魔化すか。」

グッ。

ガラリ。

音が変わったような？

力を込めるとドアは簡単に開き、目の前には

「あつ、大魔王だ。」

「あつ、勇者だww」

何で、大魔王？

扉を開けると、そこはお城（大魔王が居るんだから、おそらく魔王城）の玄関でした。

「大魔王覚悟！」

「うわ、こわーい（棒）」

私は剣を抜いて襲いかかりました（ノリで）WWW。

ガシャシャシャン！

「ちょ、」

「見るがいい！ハタヤマの雷を！！」

ガトリングガンWWW

自重WWW。

ズガガガガガ!

「うわらばっ!」

薄れゆく意識の中、耳をつんざくような轟音と共に私の耳に聞こえてきたのは

「フハハハハ、見る。勇者がまるでゴミのようだ!」

ムスカネタですたWWW。WWW。

やられちまったぜ！

そんな装備で大丈夫かw

まあ、続くんですがねwww。

〜完〜

人生オワタ、どうみてもバッドエンドです（ry）後書き（

バッドエンドって悲しいよね…。

どうも、筆者です。

次回からの主人公は誰にしようかな？

アンケートの作り方もわかんないし…。

こつなったら

皆様！

念じて下さいwww。

きっと筆者のガラスの心に突き刺さりますwww。

えっ？なら、どうやって次回の構成考えたの？

それは秘密です。

あと、お気に入り登録ありがとうございます。

3人 4人

ワーワー！！

まっ、まさか4・が最有力番号ということなのかWWW？

なわきやねえだろWWW

では、また次回にて！

不審者との遭遇（前書き）

遅れてすみません。

元々書いていた話を全て削除して、新たに作り直してました。

その結果、幽霊屋敷編をカット。

。考えて無かったわけじゃあないよ。

何ならA4ノート30冊くらいに渡って記述してあげましょつかあ
!?

嘘です。精々10ページがいいとです。

主人公投票の結果は？

後書きを読めばわかります。

では、さようなら。

不審者との遭遇

「はっ、ドリームか!？」

それは私の口癖だWWW。

どうも、レンですWWW。

今、部屋から出て和泉達と合流した所ですWWW。

どつちったかは「想像にお任せしますwww」。

ただ、和泉と合流した私がまず土下座したのは言うまでもない事ですね。

「まもなく出口。。」

全ての部屋をまわってないけど、私達は出られるんでしょうかね？

「私と和泉さんで大体の部屋をまわりましたから。多分大丈夫ですよ。」

人の心読むな W W W W W。

「でも、鍵が掛かってて開かない部屋がありませんでしたか？」

「ん？魔法で開けたけど。」

W 魔法 W W W W W。

そういえば、開錠の魔法なんてのもありましたね…。

「私の努力はいいたい。」

私は頭の回転が悪いということですねwwwwwわかりますwwwww。

鬱だ。寝よう。

それから何分間歩いたでしょうか。

途中にあった部屋で幽霊さんと遭遇したり、天井が下がってきたりしましたが、なんとか無事に出口のゲート前にたどり着けました。

「脱出一番乗りはもらったあ！」

「レイン…まっ」

『…』

「がつ！？」

ズガシヤツ！

「畏があるかもしれないって言おうとしたのに。」

「かはッ。今度からは、もう少し早く……」

最後の最後に再びのクレイモア……。

誰だ、コンナモノ仕掛けたのは…。

もちろん瀕死ですが何かWWWWWW？

「レンさん、大丈夫ですか？」

「今、回復魔法をかけますから。」

リーネ、お前たまには良い奴だなあ。

あつ、和泉の前だからかww。

「魔法『プラスターシエル』！」

「ちよ、待て待て、それ某緑の野菜さんの必殺技だからwwww。」

「瀕死の人にそんなもの撃っちゃいけませんwwww。」

「わかりました。」

「では、魔法『デスポール』！」

「それもらめええ〜！」

仲間にとどめを刺されかける主人公って、いったい…。

幽霊屋敷を抜け出した私達は、和泉の強い希望により、メリーゴ
ランドに乗る事にしました。

メリーゴランドにはあまり人が居らず、すぐに私達の番が来ます。

「んじゃ、行ってらっしゃい。」

「本当に乗らないの？」

「うん、ちょっと疲れたからそのベンチで待ってるよ。荷物持っ
といてあげるから、リーネと一緒に乗ってきなwww。」

「ありがと。それじゃあ、ちょっと行ってくるね。」

妙に口数の多い和泉。よっぽど嬉しいんでしょう。

これはこれで良いなWWW。

なんて、どうでも良い事を考えながらベンチに腰を下ろし、動き出したメリーゴーランドを眺めていたら、隣に誰かが腰掛けてきました。

「帰りの電車賃＋お土産代、食事代＋洋服代。」

「今月はゲームを諦めるしかないか」(ぶつぶつ)

何やら妙な人が現れました。

容姿は、白のTシャツに黒の短パン。顔立ちは中の中、似合わないメガネを掛けていて、目が死んでいる。

どこにでも居そうな人なのに、何故か気になる妙なオーラを纏っている。

コイツ、ただ者では無いなWWW。

「ぶつぶつ」だが、ある意味ラッキーとも「ぶつぶつ」

よくわからない独り言を隣で呟く不審者WWW。

その不審者をこっそり観察してみると、メリーゴーランドの方をじっと見つめているようでした。

まさか、和泉を？

不審者なだけでは飽きたらず、幼女にまで手を出そうとするとは。

許せん！

「もしもし、何を見てるんですかWWWWW?」

「クルクル回る木馬の上に咲く一輪の花と申しますかwwwwwwwwww」

∴。訂正します。
この人は変 です。
間違いないwww。

私がどうやってこの変 を始末しようか思案していると、

「大魔王様〜！」

メリーゴーランドの上から1人の少女がこちらに向かって手を振ってききました。

不審者なだけでは飽きたらず、いたいけな少女に無理やり手を振らせるとは…。

許せん！

私がいよいよ抹殺作戦を実行しようとしているよ。

「そろそろ帰るぞ、レーナ。」

変 がいつの間にか降りてきていた少女（レーナと呼ばれてました）に声をかけました。

ちくしょう、少女に救われたなWWW。

次に会ったら叩き潰すWWW！

「ええ、もうですか？パレード見てからにしましょうよ。」

「そいつは残念だ。せっかく三つ星ケーキショップの食べ放題席を予約していたのに。」

「では、行きましようか。」

立ち去る2人の姿を見ながら、何か忘れていている気がしてならない私でした。

「…。」

「あつ、あいつ大魔王だwwwwww。」

おまけ

ワクワク、楽しい世界のしくみ（創刊号390円）

我々が今いる、この世界が第一世界。

その他にも第二、第三と世界は、バラレルワールドみたいなものたくさんあるようだけど、それぞ
れの世界はめったに繋がる事はありません。

そして、我々が今いるのがラ・マラシーユ大陸（世界で最も大きな大陸）でその他にもナスリア大陸、フロレンス大陸（最小の大陸）、ポカリカ諸島（ポカリの生産量世界一）などがあります。

現在、大魔王の支配下にある地域は世界のおよそ85%。

消費税4%を実現したハタヤマは驚異的な速さで人民を獲得して行きました。

そこで、元々そこを治めていた国王オマエジャワ・マジカオレカ氏（通称マエジャワ氏）が焦って、やむおえず勇者を募集したわけですね。

募集の結果、勇者第一号とその仲間が現れました。

初代勇者達はジャミ、ゴンズ、ゲマという名前で、大魔王八タヤマ + 魔王レーナに挑みましたが、三丁五秒でやられましたwww。

それから沢山の勇者達が生まれては消えを繰り返すようになり、そしてついに、主人公が勇者となったのでした。

ワクワク、世界のしくみ

〜つづく〜

また、来秋も見てね！

不審者との遭遇（後書き）

忙し過ぎてやばい。

タイヤはパンクするし、卵は爆発するし、色々と破裂するし、悲しい事はたくさんだし、明日は窓際で黄昏よう。

相変わらずの妙なテンション（今回は若干低め）、筆者です。

今回筆者の心に届いた主人公投票アンケート（筆者の妄想）の結果は？

一位 レン（三票＋筆者権限五票）

同じく一位 大魔王さん（五票＋お気に入り数3票）

第三位 レーナ（六票）

第四位 和泉（五票）

第五位 ノストラ酒井（二票）

同じく第五位 リーネ（二票）

更に第五位 ミスターフランク（二票）

という結果でした。

たくさんの投票ありがとうございました。

この結果を元に小説を組み立てていきます。

それにしても、

お気に入り登録を解除してまで大魔王さんに票を入れようとするとは…。

思い返してみると後書きかなんかで、確かにそんな事言っていましたね。

お気に入り登録が解除だ　と？

オワタ

俺もう疲れたよ　ってなったせいで微妙に執筆作業が遅れたというのは内緒だ。

今週いっぱいには、ホント忙しいんですけど投稿頑張ります。

それでは、また次回お会いしましょう。

魔王城の白い悪魔wwああ、白いさ白いとも(前書き)

待たせたな。(大塚明夫ボイス)

この一週間というもの、睡眠時間が三時間しか無かったよ。

その合間を縫って小説を書くわけなんだが、圏外(一回繋がったけど)っていうね。

という訳で久しぶりの更新です。

魔王城の白い悪魔wwああ、白いさ白いとも

大魔王と遭遇した事を2人に話したのは、その日の夕方の事でした。

「…って、事があってね…。」

「カズくで可愛い女の子とデートですか。」

「嫌がる女の子を無理やりに…。」

うん、きっと嘘は言っていないWWWWWW。

「ハタヤマ、許すまじ！」

3人の心は今、打倒変のため、1つになったWWWWWW。

魔王城までの道のりは非常に厳しく、

魔物が出たり、

私がクレイモアに引っかけたり、私がクレイモアに引っかけたり、私がクレイモアに引っかけたりしましたwwwwwwwwww

どうみてもお荷物ですwwww
本当にありがとうございましたwwwwwwww

まあ、他にも空を飛んだ和泉にはミサイルの雨が降り注ぎ、魔法を
唱えたりーネには魔法カウンターが飛んできたりしましたがねww
wwwwww

防御堅すぎワロタwwwwww。

何なんでしょうか、この防御力は…。

ちなみに、辺りには勇者達の棺桶が沢山ありました。(アイテムは後でスタッフが美味しく(ry))

何とか城に辿り着いた時には、私達の体力は限界を迎えており、

「レン、見るよ。オアシスが見える。」

「もういい、ドバー！」

「最後かもしれないだろ、だから…」

満身創痍過ぎ W W W W W

これはまずいと感じた私達は、テントを張って、ポーカーに勤しむ事にしました。

「ダウトおおお！それダウトおおお！」

「甘いな、シックスカードだ！」

「マジックカード発動！光のごふー（ry」

「ムンゴ…」

「ロン！」

「ウノ！」

まあ、噛み合ってはいませんがね W W W W W W W W W W。

朝になってから、私達はいよいよ魔王城に足を踏み入れる事にしました。

「最初が肝心です。2人とも、わかってますね？」

「無論だ。」「勿論です。」「

心が1つになった我々には、もはや言葉など不要という訳だよWW
ワトソンくんWWWWWW。

「では…行きますよー！」「

「」「」「ちわー、三河屋です。」「」

あらまあ、サブちゃんｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ。

どｗｗこｗｗでｗｗ間ｗｗ違ｗｗえｗｗたｗｗｗｗｗｗ。

それはさておき、

魔王城の内部は…

意外と普通でした。

「どっかのホテルみたい。」

玄関には、高そうな絨毯がひかれており、脇にはエレベーター、エスカレーター、階段、スロープ等が配置されるなど、非常に充実した作りでした。

「上と下、どっちに行きます?」

「「「「「はエビ…」」」」」

この城の地下に何か凄いものがあると誰かが言っていた気がしたが、別にそんな事は無かったぜ！

エレベーターで2階へ向かいながら、お茶を飲んだり、カラオケしたり、モノマネ大会したりして楽しみましたwwwwww。

純粹な疑問

エレベーターってそんなに長いの？

もちろんさア！

いや、3時間経っても、まだ着かないなんて

「おかしいですね」。

「とうか、私の頭がな
wwwwwwww。」

流石に気付け
wwww。」

「まさか、
「^{「ラッブ}罠!?!?」

「バナナア！粉バナナア！大魔王が僕を陥れるために仕組んだ罠だ！」

「エレベーターに乗っても動かないなんて、おかしいじゃないか！」

「それこそ、これが不良品だという証拠！」

エレベーターごときで我々を足止めできると思ってもらっては困るな。

釘バットでも何でもちよろまかしてこんなエレベーターなんて、
1
500秒でやっちゃんよ W W W W W

とりあえず

全力で蹴る！

「砕ける！」

バキッ！

見てみい。エレベーターの扉が粉微塵だぜよ。

嘘じゃわい W W W W W W W
節子、それドロップじゃのうてエレベーターや W W W W W W W。

「あ 足が笑ってやがるぜ。」

なんですか？この硬さは。

足の方が悲鳴をあげております W W W W

私もニュータイプのはずだが ! ?

今の気分を的確に表現するなら、コーラだと思って一気飲みしたら
醤油だった時のような、何とも形容し難い気分です。

「もう無理ぽ。」

「私かやる。」

エレベーターにもたれかかっていた私に声を掛けたのは、

和泉でした。

「何をする気ですか？」

「この扉をぶち抜く。」

「女の子がぶち抜くなんて言っちゃいけません。というか、和泉はぶち抜かれるがw（自主規制）」

「って、やwっwwwwぱwwりwwかwwwwww」

いつの間にか、ショットガン構えていらっしやるwwwwww

本気だ、この娘は本気でやる気だ！

「砕け散れ」

ガシャン！ズゴン！ガシャン！ズガン！ガシャ！ズガン！

鈍い音が3回響いた後、

エレベーターの扉は粉々に

「なつてな…いだと？」

いや、もっと言つと

「傷一つ付いてないか。」

大魔王のエレベーターは化け物か？

「別の手段を考えよう。」

和泉がお手上げというように両手を挙げながら、やれやれという表情で言った。

このシーン

普通は格好いいと感じるべきなんでしょうが、和泉がやったら可愛い意外の言葉が見つからないっていうww。

「上に付いてる小さな扉を通過して、エレベーターの上に出たらどうでしょう？」

「甘いな。エレベーターの上は油とかで滑りやすいんだ。運動不足のサラリーマンが立てるような場所じゃない。」

「しかし、他に方法が」

「あの…」

さっきから黙りこくって、何かを考えていたリーネが口を開きました。

「どうしたトイレ？」

「違います。あのですね。」

「いじから、出られると思います。」

「What?」

魔王城の白い悪魔wwああ、白いさ白いとも（後書き）

ね、眠い。

連日の地獄を耐え忍んで、

ソロモンよ、私は帰ってきたあ！！（大塚明夫ボイス）

相変わらずの妙なテンション、筆者です。

色々ゴタゴタして申し訳ありませんでした。

投稿が遅くとも、飽きて放置なんて事は絶対にしませんので、これからこの小説をよろしく願います。

再突入！？（今回は厨二展開だよ）（前書き）

皆様、遅くなって申し訳ない。

今は反省している

ちなみにこの物語はフィクションで、筆者の妄想から出来ている。

それでも構わないと言う方はどうぞ。

再突入！？（次回は厨二展開だよ）

「魔法で脱出してはいかがでしょうか？」

「…」

「。」

「また魔法か。」

「そうだね。そんな便利なものがあつたね…。」

「…」

秀囲気が気まずい

そんな秀囲気なんて、私がぶっ壊してやりますよwww。

「まあ餅付け、餅付けwww。茶でも飲んでいけよオードリー。」

「誰がオードリーですか、というかバナージ君の声真似しないで下さい。しかも妙に似てるし。」

「この日のために練習しました。すみません。」

初見の際にラプラスの箱をラプラスの箱？とってたのは、私だけじゃないはずだ。

「活字じゃ伝わらないか。」

私がちよっとうなだれていると、ポンと肩に手が乗せられました。

「大丈夫、一部のファンには伝わったから。」

「そうか、ならばもう何も思い残す事はない、和泉ありがとうこれで私も成仏出来るよ。」

「さらば、愛しき人々よ！アイラブユー」

「悪霊退散！」

「ぐぎゃあああ〜！！」

「おのれ和泉め、次こそは…。」

「しょうもない事してないで脱出しますよ。」

せっかく和泉と遊んでたのに、

「やれやれだぜ。」

「そのポーズ、不愉快です。」

「ジョジョっぽいポーズをとってたら、リーネにピシヤリと言われま
した」

「でしょうねWWW自分でもなんか悲しくなったもん。」

「馬鹿レンさんはほっといて、ではいきます!」

「ル・ダ・ソルト(キラッ)」

「うぜえWWW」

気が付くと、私達は魔王城の玄関前に居た。

「まさか、本当にダンジョン脱出用の呪文が効くとは。」

「考えてもみて下さい。ここは敵の本拠地。いわば、難易度MAX
のダンジョンとも言える場所ですよ。」

「まあ確かにその通りなんだけど、あいつが脱出（転移）系の魔法をかき消す防御壁を張ってないなんて、おかしいなと思ってね。」

「？」

「これは、何かあったな…。」

「全員、周囲の警戒を怠るな。もう一度魔王城に潜入する。」

「「シリアスモードのレン？」」

皆様、事態は思ったよりも切迫しているようです。

「ちなみに、おやつは300円まで、バナナはおやつに入りますwwww」

和泉、リーネ視点

「」が付いてない所は勿論心の声。

シリアスなのか、ボケてるのかわからん。

同感ですね。

よし、リーネはツツコミを入れる、私は様子を見る。

わかりました。

(この間およそ2秒)

「このお菓子、キングオブコロコロって言って甘いたこ焼きみたいなものなんですけど、自分で作ったので300円の中には含まれませんよね?というかシリアスなのかボケなのか、どちらかにして下さい。」

斬新なツツコミだったな…。

すみません、思い付かなくて。

気にするな。

(この間、およそ1〜2秒)

「材料費は3000円以下ですか？」

YES

NO

NOの場合はトップからやり直して下さい。何度もこのメッセージが表示される場合は、こちらまでお問い合わせ下さい。『URL』
www.RenRenRen.co.jp

『彼女が冷たい？ それは、あんたが浮気してるからだろうがww係』

「腹立つ、良くある質問に対する運営側からの答えみたいで、凄く腹立つ。」

「というか、そつちじゃなくてシリアスなのかボケてるのか〜の方
方に答えて下さい。」

「成る程、そつちだったか。」

「ならば答えよう!」

「斯く斯く然々（かくかくしかじか）でね。」

「そんな訳があったんですか。（しんみり）」

ポンポン。

「ん、和泉さん、どうかしたんですか？」

「レンはただ、かくかくしかじかって言ったただけだよ？」

「そんな…、てっきり説明が入ってるものと。」

「漫画じゃあるまいし夢を見るのは止めるんだなWWW」

「この小説はそれ程甘くはないよ。」

「理不尽ですね。」

「てか、小説言っなしWWW。」

『すまん、つい。』

言霊だ と？

このメタギフリークがww

「さて、一息ついた所で行きますか。」

「はい、では休憩しません？」

「なん だと？」

「これだから最近の若いもんは。わしらが若いころは、外で元気にブリッツボールやったもんじゃった。」

「おやつでも食べましょよ。」

「だが断る。」

「殺す。」

「ちよ、ヤンデレヤンデレ。」

今までのポケがリーネの怒りのボルテージを上げたらしいWWW

「平和だねえ。」

「和泉お茶飲んでないで助けて。」

『リーネの魔法が暴発した。』「サンダーブレイク！」

「当たらんよ。」

「サンダースピア！」

「だがしかし。」

「終わりです。連続魔法サンダーオーブ×2！」

「全方位だ と？ オワタ」

ビリビリ

「そんなレベルの効果音じゃない。」

「爆発しちまうー。」

しまった。ツッコんでたら直撃した。

魔法防御が高いからあんまり効かないはず

なのに

「あ、そついや暴発してましたねWWW」

意識が朦朧としてきたよ。

「平和だねえ。」

この人、まだお茶飲んでらっしゃった。
和泉覚えとけよ、あとで

絶対 お

…。

やすみ。

再突入！？（今回は厨二展開だよ）（後書き）

まずは謝っておきます。

更新遅れてすいませんでした。

六泊八日の旅とか、計算間違えてるしwwwざまあwww

とか思ってたなら、間違ってたのは私の方でした。

日付変更線だ と。

あと、ここ最近色んな小説を読みまくって文章力、想像力の向上を図ってるんですが、

なんというか

みんな字が詰まっていますなあ。

もっと丁寧な、あまり文字と文字の間を空けないように書いていきたいと思えます。

最後に、タイトル通り次回は厨二展開さ。

今日中には投稿出来るはず。

お楽しみにね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1348x/>

そんな装備で大丈夫かww

2011年11月20日19時47分発行